

平成 22 年 3 月 24 日
コード番号 : 09-A-013

実績報告書

特定非営利活動法人
シェア=国際保健協力市民の会



1. 事業の概要

- ① 事業名 : いのちと医療を考える講演会及びセミナー開催事業
- ② 事業実施期間 : 2009年10月23日 ~ 11月3日
- ③ 事業実施地 : 東京都、長野県佐久市、愛知県名古屋市
- ④ 事業内容 : シンポジウムおよび講演会の開催

2. 活動の目的

プライマリ・ヘルス・ケア(PHC)の第一人者であり、またご自身が障害を持っていることもあって、地域リハビリテーション(Community Based Rehabilitation: CBR)に関する理論だけでなく実践的に取り組んでいるデビッド・ワーナー氏を日本に招いて各地で講演会やシンポジウムを開催し、途上国における草の根の保健医療を学ぶと共に、日本の医療の本来の在るべき姿と今後について考える機会を提供する。

3. 研究活動の内容と方法

シェアがワーナー氏を招聘し、デビッド・ワーナー氏の講演会およびシンポジウムを開催する。それに加えて、プライマリ・ヘルス・ケアおよび地域リハビリテーションに取り組んでいる他のNGO、JICA、医療機関の協力を得て、ワーナー氏の講演会を各地で開催する。各地域の講演会は、それぞれ協力団体が独自に準備・広報を行う。

4. 活動の実施経過

	月日	内 容	宿泊
1	10月23日 (金)	ワーナー氏来日16:20成田着 (JAL 001) 出迎え→本田邸へ	東京
2	24日 (土)	講演会等の準備(午後からシェア事務所へ) 午後:読売新聞取材(14時~15時30分)	東京
3	25日 (日)	①シェア主催講演会(東京) 「保健医療と人権 - すべての人が健康に暮らせる社会は実現できるのか?」 @国立国際医療センター 時間:13時~16時	東京

4	26日 (月)	<p><u>②小児障害者のリハビリテーションに関する講演会</u> 「途上国の障害児たち ー 私自身の経験と日本の障害児たちや 家族へ伝えたいこと」 @心身障害児総合医療療育センター(板橋) 時間:16時~18時</p>	東京
5	27日 (火)	<ul style="list-style-type: none"> ・午前、朝日新聞取材(和田氏) ・午後、山谷を訪問する可能性あり ・シェアスタッフ向けミニ講演 (16時~17時) 	東京
6	28日(水)	<p><u>③JICA東京でのCBR(地域リハビリテーション)セミナー</u> 「Inclusive and Dynamic Developmentの実践に向けて」 @新JICA本部(麹町) 時間:14時30分~17時30分 ※JICAネットを使ってアジア数カ国のJICA事務所と結ぶ</p>	東京
7	29日 (木)	<p>午前:開発ジャーナル取材(10時30分~12時) 東京→佐久へ移動 <u>④佐久総合病院での医療者向けの講演会</u> 「世界のプライマリ・ヘルス・ケア…過去と将来」 @佐久総合病院 時間:18時~20時</p>	佐久
8	30日 (金)	<p>午前:地方の診療活動視察 午後:佐久→東京へ移動</p>	東京
9	31日 (土)	東京→名古屋へ移動	名古屋
10	11月1日 (日)	<p><u>⑤AHI・日本福祉大学・国際開発学会東海支部主催講演会</u> 「人びとの手に健康を それを阻むものと私たちの課題」 @日本福祉大学名古屋キャンパス 時間:13時30分~16時30分</p>	名古屋
11	2日 (月)	<p>名古屋国際空港から離日 名古屋発 13:35 (JAL 056) 成田着14:45 成田発 18:15 (JAL 002)</p>	

(1)シェア主催シンポジウム (10月25日 国立国際医療センター(新宿区))

「私たちの”いのち”保健医療と人権ーすべての人が健康に暮らせる社会は実現できるのか?ー」

基調講演：デビッド・ワーナー

パネルディスカッション：

座長：佐藤寛 (日本貿易振興機構 上席主任調査研究員)

パネリスト：デビッド・ワーナー

石川信克 (結核予防会結核研究所所長)

本田徹 (シェア代表理事、浅草病院医師)

工藤英美子 (地域保健専門家、看護師)

参加者数：302人

【概要】

今回の一連のワーナー氏来日イベントの中心事業となるもので、「私たちの”いのち” 保健医療と人権 一すべての人が健康に暮らせる社会は実現できるのか?」と題したシンポジウムをシェア主催で開催した。当日は、会場の収容能力いっぱいである302名の参加者があった。

最初に、ワーナー氏によるスライドを使った約1時間の基調講演があり、その後保健医療分野の専門家を交えたパネルディスカッションを行った。

ワーナー氏の基調講演は、グローバル化によって、環境の破壊、戦争、貧富の差の拡大などが進む世界にあって、保健医療の分野に留まらず世界が持続可能なものになるためには、教育と他人を思いやる考え方方が重要であることを強く訴えた内容であった。

その後のパネルディスカッションでは、4人の専門家を加えて、①賢明なセルフケアとコミュニティケア、②21世紀のPHCとグローバル経済、③医療と人権～NGOの役割と使命とは～という3つのテーマで議論を行った。

(2) 小児障害者のリハビリテーションに関する講演 (10月26日 心身障害児総合医療療育センター(板橋区))

「途上国の障害児から学んだこと」

講演者：デビッド・ワーナー

参加者数：63人

【概要】

心身障害児総合医療療育センターの原泰夫先生の協力を得て、障害児の親子の参加を前提とした講演会を開催した。ワーナー氏自身も生まれつき足に障害を持っていることもあり、障害者を共生する地域づくりを提唱している。特に障害児に関しては、child to childの重要性を提唱しており、健常児が足を紐で縛るなどして障害児が直面する困難を疑似体験し、そこから障害児にとっても生活しやすい環境作りにいっしょに取り組む重要性を認識して取り組むことを訴えた。当日参加者の中には、一組の障害児親子がいた。

(3) 地域リハビリテーションに関するセミナー (10月28日 国際協力機構本部(千代田区))

「Inclusive and Dynamic Developmentの実践に向けて」

—どうすればすべての人々が開発に参加できるか—

基調講演：デビッド・ワーナー

パネルディスカッション：デビッド・ワーナー、中西由起子

司会：久野研二

参加者：109人（東京会場のほか、テレビ会議システムを通じて、大阪、ミャンマー、キルギス、マレーシア、フィリピン、タイ、ケニアからも23人が参加）

【概要】

国際協力機構（JICA）人間開発部との共催で、地域リハビリテーションに関するワーナー氏のセミナーを開催した。このセミナーは、JICAのテレビ会議システムを利用して、JICA本部の会場だけでなく、大阪、ミャンマー、キルギス、マレーシア、フィリピン、タイ、ケニアの各JICA事務所を結んで、ワーナー氏の講演の後にはテレビ会議の参加者を交えて活発な質疑応答が行われた。

(4) 医療者向け講演会 (10月29日 会場：佐久総合病院（長野県）)

「世界のプライマリ・ヘルス・ケア — 過去と将来」

講演者：デビッド・ワーナー氏、参加者：400人

【概要】

途上国における住民主体の保健医療の重要性を説くワーナー氏の思想は、地域医療に取り組んだ若月俊一先生の思想と同じ基盤を持っている。その若月先生が地域医療を実践し、日本における地域医療の先駆的病院とされる佐久総合病院において、ワーナー氏による医療者向けの講演会を行った。また、翌日には地域医療の実際の活動を見るために、地域の診療所の視察も行った。

(5)デビッド・ワーナー氏講演会 (11月1日 会場：日本福祉大学名古屋キャンパス(愛知))

「人々の手に健康を それを阻むものと私たちの課題」

講演者：デビッド・ワーナー氏、コメンテーター：坂本真理子氏、参加者：90人

【概要】

途上国のヘルスワーカーを日本で研修することを目的に設立されたアジア保健研修所(AHI)は、プライマリ・ヘルス・ケアをまさに現場で実践しており、同じ保健医療専門のNGOとして日頃から情報交換や交流を行っている。そのAHIが中心となって開催された講演会では、日本福祉大学の学生や中部地区在住の保健専門家などの参加を得て講演会が開催され、ワーナー氏の講演後には活発な質疑応答が行われた。

5. 活動の成果

世界的に著名なプライマリ・ヘルス・ケアの理論家であり実践家であるデビッド・ワーナー氏を日本の招聘するに当たって、せっかくの貴重な機会により多くの日本人々にワーナー氏と接する機会を作りたいと考えていた。シェア単独では、参加人数も地域も限られていたが、心身障害児総合医療療育センター、国際協力機構人間開発部、佐久総合病院、アジア保健研修所など、国際保健やCBR分野の専門組織の協力を得て、東京で3回、長野で1回、愛知で1回の合計5回の講演会を開催することができた。これらの講演会に参加した人は、合計で983人になった。

また、来日に合わせて、ワーナー氏の主著であるWhere There Is No Doctorの日本語翻訳版「医者のいないところで」をシェアで出版したが、この本の話題性もあり、マスメディアにも紹介されて、プライマリ・ヘルス・ケアの理念をより多くの人に知ってもらうことができた。

以下は、シェアシンポジウムの参加者のアンケートに書かれた声の一部である。

- ・ 途上国の状況を改善するには、途上国の人達自身が学び合っていくことが重要だと感じました。私たちはそれをサポートする立場であることを再認識しました。
- ・ 子供たちは私たちの先生であり、未来です。彼らから学び、彼らが彼らへ伝える力を信じたいと思います。
- ・ 「PHCはネガティブな発想を変えるための大切なツール(D.ワーナー氏)」。日本でも他の国でも、まず自分たちのできることを増やすことが、自身の幸福のためにも家族・地域への貢献としても近道であると思う。また人間は単純に「学び、できることが増える」のは嬉しい！！
- ・ 何をするにも行動の基になるモチベーション、原動力が大切になってくると思います。私たちは人を愛し、助けることに力を使うこともできれば逆に破壊のために力を行使することもできます。私たち1人1人がよいことのために働きかけていければと願います。

- ・ 「健康と教育」のつながりについて考えのなかつた自分にも、人々のためにはどんな教育が必要かよく分かりました。教育の必要性が叫ばれながら、どうしても知識を植えつけ方のものを浮かべてしまっている中で、本当に必要なものは何かということを考えさせられました。
- ・ Health For Allというのはとても壮大な目標だと思うが、希望を持って取り組むことが必要である。DWさんの話を聞いて勇気づけられました。

5. 今後の課題

- ・ デビッド・ワーナー氏による講演が、複数の地域で開催されて合計で約900名の人々が直接ワーナー氏の話を聞く機会が得られたことは大きな成果であったが、それでも広がりと言う意味では限界がある。そのために、シェア主催シンポジウムを始めとして、複数の会場でワーナー氏の講演内容をビデオで撮影した。今後、このビデオを編集して販売し、より多くの人々にプライマリ・ヘルス・ケアの理念を知る機会を提供する。また、今回の来日に合わせてワーナー氏の主著であるWhere There Is No Doctorの日本語翻訳版「医者のいないところで」をシェアで出版したので、この本の販売を通してPHCの理念と実践をさらに多くの人々に伝えていきたい。
- ・ 今回の事業では、日本の医療の現状、特に地域医療のあり方を考えることも目的として掲げていた。そのために、東京においては山谷地区の野宿者に対する医療や在宅ケアの現状をワーナー氏とともに視察したり、日本の地域医療の拠点のひとつである長野県佐久総合病院の地域診療所を視察したりした。両地域の視察に際しては、それぞれ関わっている医療従事者との交流、意見交換を行ったが、それを公開の討論の場で議論することはできなかった。ワーナー氏の目から見た日本の医療の課題や助言を得て、日本の地域医療に関してさらに関係者との議論を深めていきたい。

以上、